

選択的シングルマザーの視点から捉える現代日本女性のライフスタイルとジェンダー意識

周 馨驥 (神戸大学)

日本社会における女性のライフスタイルは多様化しつつあるなか、「選択的シングルマザー」という新しいライフスタイルが現れてきている。選択的シングルマザー（英語：single mother by choice）とは、自らの意志で結婚せずに子どもを産むことを選ぶ女性のことである。日本において、2014年に選択的シングルマザーである団体「SMC ネット」は発足した。近年、SNSでは「選択的シングルマザー」を自称し、発信している人々は散見された。しかし、日本の文脈でシングルマザーはつねに貧困のレッテルを貼られ、マイナスなイメージである。あえてシングルマザーという生き方を選択したのは女性の新しいライフスタイルと言えるのか。また、一人で子どもを産むことによって結婚の規範を越えることにはポジティブな意味を与えているが、母になることを選択するのは、女性=産む性=母性という図式に縛られていると考えられる意味ではポジティブと言いがたい。このような「表裏がある」カテゴリーをどのように理解すればよいだろうか。とくに、現代社会を生きる女性たちが、母になることにあまりにもこだわっているのはなぜだろうか。本研究では、そのような問題意識に基づき、「選択的シングルマザー」というライフスタイルはどのように形成されているかという過程を考察した。

女性のライフスタイルの多様化に関しては、それらの女性の母親らしさと自分らしさの葛藤に多くの関心を寄せてきた。しかし、結婚して子育てをしている母が抱える葛藤は「母」が抱える葛藤と捉えられていた。現代日本の母親にとってはかつてのように自己献身によって子どもに尽くすということだけではなく、個としての自分というものも求められるようになったことから、さまざまな母親のあり方が析出され、母親をとりまく規範や意識は変化しつつあることが明らかになった。しかしながら、母親のあり方が多様になるなかにおいても、選択的シングルマザーにはイメージや共有される価値規範に違いがある。本研究はそれらの「違う」ということに注目し、選択的シングルマザーはどのようにして母親をとりまく規範を受容しつつ、個としての自分というものを求めるかを明らかにすることを目的とする。

そのため、筆者は4人の選択的シングルマザーに対して、インタビューを行った。彼女たちの語りによって、「個人主義的な女」、「結婚より母になることを優先する」、「母親らしさと自分らしさは統合できるもの」という3つの側面から現代日本女性のライフスタイルとジェンダーがいかに関係しているのかを分析する。以下のようなことを明らかにした。第一に、それらの女性の子どもを持つことへの願望は単に個人的欲望だけでなく、定住家族や交際経験、偶発的な出来事さえ影響を与える。第二に、結婚しないことを決めたのは、結婚の現実的な価値の低下のため、彼女たちは結婚に対する期待も薄くなったのである。必ずしも結婚規範を否定するわけではない。第三に、妊娠・出産適齢期というものは、強まった子どもを持つことへの願望と低くした結婚の現実的な価値に結びつけられることによって、子どもを持たないことへの不安をもたらした。その不確実性を解消するために、彼女たちは自らの妊孕力を確かめる行動を導く。それだけでなく、妊孕力可能性を保つため、自らの身体を健康な状態に保ち、肉体的・精神的な絶えざる成長を志向し、出産後は子育てや仕事との両立に勤しむといったようなことを理想像と位置づける。以上の考察を踏まえ、女性のライフスタイルの多様化とともに、近代的母親規範が揺らぎつつあるが、母になることは現代女性にとって依然として重要である。女性は生殖に向けて身体への自己管理を強化する傾向が示される。産む性を持つことは女性のライフスタイルとして内面化されたものとして、ジェンダー規範が働いているという結論に至った。

キーワード：選択的シングルマザー、女性のライフスタイル、ジェンダー